EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

EDO-TOMO えど友

えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

第71号
平成25年
(2013)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

新春特集「笑う門には福来る」……1～3
新年祝辞　江戸博竹内館長・友の会松原会長 ……3
えど友広小路 ……4～5
　会員に聞く「飾り伊勢海老職人の若松謙二さん」／会員からの投稿「播州三日月藩」／えど友サークルだより／友の会めも
友の会セミナー「坂本龍馬と刀剣ー龍馬を斬った刀」……6
友の会セミナー「家康六男忠輝の末裔松平忠敏の幕末史」…7
友の会特別観覧会「維新の洋画家　川村清雄」……8
江戸博クリップ「おひとりさま」……8
見学会「日光東照宮および周辺見学」（バスツアー）……9
『町方書上』翻刻版 いよいよ刊行！ ……9
江戸名所図会を歩く…⑤［霊岸島から鎧島］…… 10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

新春特集

笑う門には福来る

ー吉田奈緒子学芸員に聞くー

あけましておめでとうございます。新しい年には誰しも今年一年の幸福を願わずにはいられませんが、「笑う門には福来る」という新年にふさわしい企画展が1月27日(日)まで開催中です。この企画展を担当された江戸博学芸員の吉田奈緒子さんに「笑い」についてお話をうかがいました。江戸のころより現在に至る笑いと幸福感について改めて思い起こすこととなりました。

出席者：吉田奈緒子学芸員
参加者：松原良(友の会会長)
　　宮　俊(事業部会)
　　並木愛(総務部会)
司　会：佐藤美代子(広報部会)

今こそ笑顔を

佐藤　はじめに企画展の意図をご説明ください。

吉田　企画を考えていたのは一昨年、つまり東日本大震災のあった年で、私は東北にゆかりがあり、その後も自分自身が傷ついたところもあったので、皆さんに笑顔になってもらいたいというのがきっかけで、笑顔の絵を集めて元気を出してもらおうと思いました。

佐藤　第1章で「笑顔があふれる」というのがありますがどのような内容でしょうか。

吉田　先ほどお話した笑顔の絵を集めたというのは第1章が中心になっています。元気な子供を描いた絵、そして温かく見守っている周りの人の笑顔という二つの視点から構成されています。

佐藤　子供たちの絵が多いのでしょうか。

吉田　そうですね。真冬の展覧会なので雪の中で子供が元気に遊んでいるとか、羽子板で羽根つきをしているものなどを展示しています。

▲吉田奈緒子学芸員

松原　それは江戸博にある資料からのものですか。

吉田　はい。すべてそうです。

松原　時代はいつごろのものですか。

吉田　この『風俗三十二相　かわゆらしさう』(次ページ参照)は明治に描かれましたが、江戸時代のものを中心にご覧いただきます。母親の愛はいつの時代も変わらず温かい雰囲気があるので、皆さんにその辺を感じていただければと思います。

佐藤　お正月の遊び道具なども展示されるのでしょうか。

吉田　遊び道具としては福笑いを展示しています。第3章でユーモアを効かせた資料を展示しています。その中で福笑いは今の子供はあまり知

▲『風俗三十二相　かわゆらしさう』
月岡芳年 / 画　1888 年（明治 21）

らないのではないかと思い、出展しました。

宮　福笑いは今はなかなか買えないですね。

吉田　資料を展示しますが、今回ぜひ子供たちにも体験してもらいたくて、拡大したものを作り遊んでもらおうと思っています。ポスターサイズくらいのものを作ります。

▲佐藤美代子さん

佐藤　楽しんでもらえるとよいですね。

吉田　福笑いは家の中でするものですが、正月遊びにはコマや羽根つきや凧揚げなど、外でするものが多くあり、江戸時代から子供は外に出て遊ぶのが体に良いという考えがありました。

宮　それらはみんな笑いに結びついていますね。羽根つきにしても墨を顔に付ける、凧揚げでも勢いが出てくることを笑うといった点でやはり笑いにつながりますね。

佐藤　女の子の遊びはどうでしょう。

宮　かるた、双六ですかね。

佐藤　「笑う門には福来る」のかるたは展示するのですか。

吉田　今回は展示していません。縁起物で盛り上がりましょう。

佐藤　第２章は「福が笑う」となっていますが、どういうものですか。

吉田　第１章で人々の笑顔を見ていただき、第２章ではお正月ということで七福神などの縁起物で盛り上げたいと考えました。

並木　七福神は地方に点在し、身近なところにもありますね。

吉田　今も七福神めぐりが各地で行われていますね。

松原　この近辺では亀戸、隅田川などが知られています。

並木　小石川もありますよ。

宮　流山、松戸にもあります。

佐藤　北千住、日本橋、谷中もそうですね。

視点を変えての笑い

佐藤　第３章の「ユーモアをちりばめる」はどのような内容でしょうか。

吉田　少し視点を変えて笑っていただこうと思いました。例えば北斎漫画は、当時としてはデッサン集みたいなものですが、今の漫画のルーツともいわれるもので、よく見ると面白い表情のものがあるのでそういったところを展示したり、山東京伝が作った物まね芸を集めた版本を展示します。少しひねった面白さをお伝えしたいと思います。

松原　判じ絵はどうですか。

吉田　展示しようかとも思いましたが、今回は見てすぐわかる単純でわかりやすいものにしぼりましたので、判じ絵の展示はありません。

佐藤　北斎、山東京伝以外ではどうでしょうか。やはり版画が多いのでしょうか。

吉田　第３章は、版本や刷り物などが出ます。

宮　招き猫、だるまさん、タヌキの置物の絵はありますか。

吉田　縁起物の展示は、七福神、招き猫、福助、お福さんくらいにとどめました。

並木　子供の遊びはどうでしょう。

吉田　幕末に戊辰戦争を風刺したもので子供遊びが描かれた絵が流行したのですが、その中から何点か展示します。

松原　その内容はどのようなものでしょうか。

吉田　子供が遊んでいる絵なのですが、実は着物柄や持ち物が絵解きになっている、そういうものです。

▲宮　俊さん

宮　全部で何点ぐらいの絵になりますか。

吉田　絵だけでは数えていませんが第１章～第３章全体の点数は40から50点ほどです。

松原　七福神の宝船は回文になっていますよね、江戸時代は。

吉田　宝船は最初はシンプルだったようですが、江戸時代になってどんどんいろんなものが積まれたり回文もついたりしました。宝船の元は江戸時代と言えるかも知れません。

宮　解説は表示されているのですか。

吉田　はい、すべての資料に付いています。

佐藤　見やすいようにしていただければいいですね。

宮　巳年の干支にちなむものはありますか。

吉田　はじめそういう構想もあったのですが、やはり元気になっていただきたいということでこういう形になりました。

時代が変わっても

宮　われわれの子供のころは獅子舞や三河万歳が来ましたよね。いつごろからなくなっちゃたんですかね。

▲並木愛さん

並木　何しろ戦後は働くのに一生懸命でしたから。

宮　私は小学生のころあったのを覚えています。

吉田　お正月の雰囲気は薄れているかもしれませんね。今の人はクリスマスが好きですから。

佐藤　正月飾りよりクリスマスの方が派手になってきていますね。江戸博でお正月の楽しみはありますか。

吉田　獅子舞も来ますし、お正月は

新　年　祝　辞

江戸東京博物館　館長　　竹内　誠

明けましておめでとうございます。

江戸東京博物館は、本年３月28日には開館から20年となります。いよいよ成人式を迎えるまでに成長させていただきました。これもひとえに、友の会の皆さんの温かいご支援の賜物と感謝しております。

昨年５月には、当館からも近い押上・業平地区に世界一高い東京スカイツリーが開業し、その完成記念特別展「ザ・タワー」を開催しました。以降特別展は「開館20周年記念」という冠をつけて開催、これは今年も続きます。特に３月には開館記念日を中心に数々の記念行事を予定しております。

また４月から５月にかけては、信州善光寺の出開帳が本所回向院にて行われます。この江戸以来の伝統的行事で両国界隈は大いに賑わうことでしょう。当館でもこれに関連する企画展を準備しています。

本年もよろしくご支援の程お願いいたしますと共に、江戸博友の会のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

新年ごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　　松原　良

新年おめでとうございます。会員の皆さんにとって今年も輝かしい１年となりますようお祈りいたします。

早いもので、友の会も今年で13年目に入りますが、私たちの母体である江戸東京博物館は今年３月に開館20周年を迎えます。開館記念日を中心に種々の記念行事が予定されているとのことですが、私たち友の会も江戸博の20周年を大いに祝い、参加させていただきたいと思っております。

昨年も江戸博のご指導・ご支援と会員の皆さんのご協力により、セミナー、見学会、古文書講座、特別観覧会に加え、地域文化探訪・見学会という新規事業も立ち上げ、それぞれ順調に推移し、サークル活動には多数の皆さんのご参加をいただいております。

今年も友の会の基本方針「会員自らが参加し創造していく会」が真の意味を持つよう、皆さんの各種事業へのご参加はもちろんのこと、さらなる発展へ向けての積極的かつ建設的なご意見、ご提案を期待いたします。

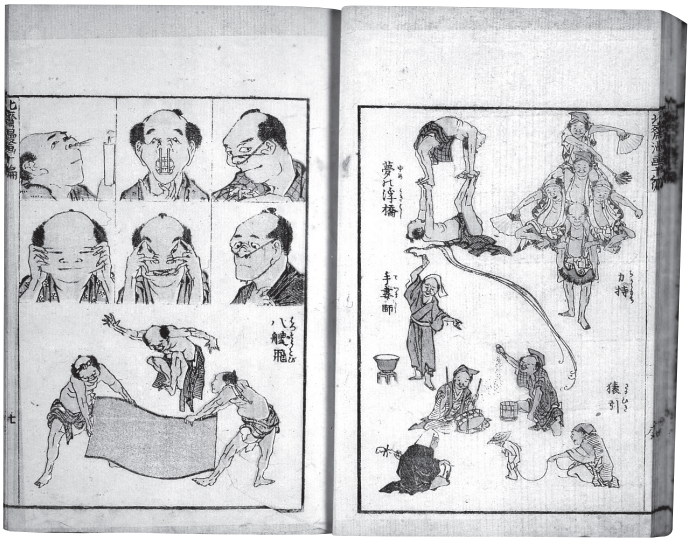
いろんなイベントがあります。

松原　今回は笑いの中でも目で見てわかるものが中心ですね。

吉田　そうですね。幸せな笑いを中心にします。

佐藤　お正月におめでたい笑いを見に江戸博に来てくださいということでしょうか。

吉田　なんといっても、２日、３日は常設展のみ入館無料ですから。



▲『北斎漫画』　葛飾北斎 / 画
1814年～1878年（文化11～明治11）

松原　ところで七福神めぐりで歩くようになったのはいつごろからですかね。

吉田　庶民にも広まったのは江戸時代でしょうね。七福神は日本からとインドからと中国からと三つの国の神様で構成されています。

宮　七福神は個別の絵もありますね。私は布袋（ほてい）様に興味があります。

吉田　布袋様は子供と描かれることも多く、唯一実在した人物といわれています。また恵比寿様が恵比須顔という笑顔で親しまれていますね。

佐藤　昔は恵比寿様、大黒様とよく正月に床の間にかけました。

吉田　恵比寿様、大黒様は対になることが多いです。

宮　神田明神には恵比寿様、大黒様の両方が祭ってありますね。

松原　話は変わりますが、両国というと忠臣蔵と北斎ですが、忠臣蔵も毎年この時期のテーマですね。

吉田　そうです。今もファンが多いですね。今年も忠臣蔵展を行います。同時開催なのでお楽しみください。

▲松原良さん

松原　『北斎漫画』も面白いですね。

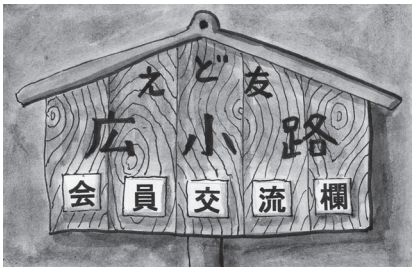
吉田　『北斎漫画』は人気で死後に弟子が出版して完結しました。タッチは軽いのに生き生きしていますよね。

並木　何冊もあるんですか。

吉田　今回は６冊展示します。「笑う門には福来る」の言葉のとおり、皆様にも福が招かれますように。こちらの展覧会をよろしくお願いします。

佐藤　今日はありがとうございました。

【記録】文・写真：広報部会・天野哲夫



会員に聞く

飾り伊勢海老職人の若松謙二さん

日本で唯一の「飾り伊勢海老」職人である若松さんの工房を訪問しました。お正月の「お供え」や「しめ飾り」に使われる飾り海老は、現在は大半が「土」で細工されていますが、若松さんは江戸時代からの伝統を固く守り、今でも本物の伊勢海老を使い続けているのです。その技とはどんなものか、「飾り伊勢海老」作りの苦労話をじっくり伺いました。

――「飾り伊勢海老」を作り始めたきっかけは？

神田の青果市場で働いていた父親が、とび職の頭（かしら）からの依頼で始めた仕事を引き継ぎました。とび職の前身は江戸の町火消しで、当時特権として町中のお飾りを一手に引き受けていました。

今でもその名残で、私のお得意先の大半はとび職の方々です。とび職は、私から仕入れた飾り海老を使って、お供えやしめ飾りを作り、ホテルや大手百貨店などに納めます。私は二代目ですが、父の代も含め家業としては、今年でちょうど100年目になります。

――伊勢海老の買い付けが重要とのお話ですが

毎年８月になると、海老の買い付けのため南房総、千倉の浜に３週間ほど滞在します。この買い付けは、飾り海老の仕上がりの良し悪しの８割を決めると言ってよいほど大事な作業です。

海老漁は、昔と違って網を機械で巻き上げるため雑になり、ひげや足が完全にそろっている海老を集めるのが難しくなりました。１シーズンで、３,000匹ほど買い付けますが、一匹ずつ自らの手と目で瞬時に選別します。海老は生きたまま氷で固められ、作業の始まる11月初めまで冷凍庫で保管します。

――工程は？　一番のご苦労は？

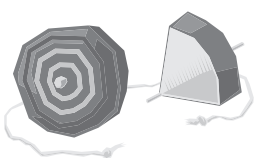
まず、流水で解凍された海老をかごに丁寧に並べ、「にがり」を加えた塩水でゆでます。この塩の濃度と火加減は秘伝です。真っ赤にゆでられた海老は「ささら」と呼ばれる竹のブラシで磨かれます。赤が一層鮮やかになります。そして、海老に竹串を刺す行程に移ります。この作業を「のす」といいますが、職人言葉で「やっつける」からきています。私は、形を整えるこの作業に一層心を込めます。海老が、凛（りん）とした姿になり、色鮮やかに仕上がると苦労が報われた思いがします。

▲若松謙二さん

――後継者は？　これからの抱負を

おかげさまで、最近「技を引き継ぎたい」と申し出てくれる人が見つかりました。最盛期と比べ、すっかり需要が減ってきてはいますが、多くの職人が連綿と継承してきた「江戸の文化と技」をこれからも後継者と共に楽しみながら、後世に伝えていきたいと思っています。

【聞き手】文・写真：
広報部会・五十島正修



会員からの投稿

播州三日月藩

高田利正

廃藩置県まで続いた藩の一つに播州三日月藩がある。石高15,000石、外様の小藩であるが、藩主は森蘭丸で著名な森氏の流れをくむ一族である。

姫路（兵庫県）からJR姫新線で約１時間、津山（岡山県）に向かって進むと「三日月」という駅がある。山に囲まれた盆地の小さい町である。晩秋から冬にかけての早朝、深い霧が幻想的な風景を見せる地である。元禄10年（1697）津山藩の改易により支藩であった津山新田藩主森長俊がこの地に移封された。乃井野という地域に陣屋を構え屋敷町の整備を行った。長俊は津山藩二代目藩主長継の五男（ホームページ森氏家譜では四男）として生まれている。

本家の津山藩は、森忠政（森蘭丸の弟）により慶長８年（1603）立藩された。忠政は豊臣秀吉が死亡すると徳川家康に接近し、家康支持の立場を明確にして功績をあげ、慶長５年（1600）信濃国川中島へ入封。小早川秀秋の死によって小早川家が無嗣改易されると、美作一国186,500石が与えられ川中島から転封した。津山城を築城し外様の大大名として栄えた。しかし五代藩主衆利（あつとし）の時に藩主乱心との理由で改易となった。

三日月藩の藩祖長俊は長身の偉丈夫で、趣味が広く風流人で優れた人材であったと言われている。歴代藩主は学問に熱心で、五代藩主快温（はやあつ）は寛政７年（1795）藩校広業館を設立、学問・武芸に力を入れた。この「広業」の名称は今も小学校名に引き継がれている。幕末、藩は勤王に早くからまとまり最後の藩主俊滋は自ら兵を率いて北越や庄内などで戦った。

ところで、東京で三日月藩関連の史跡がないかと思い、切絵図（尾張屋版、安政４年・1857）と現在の対比図をみると、東急「目黒」駅前大崎

３丁目付近に森伊豆守上屋敷が表記されていた。花房山通りを「五反田」駅方向へ下ったところに、品川区が立てた「旧・播磨三日月藩森家上屋敷跡」の案内板がある。１万坪余の広い敷地があり、屋敷一帯の字は森家の「森」と舌状台地の先端を示す「崎」から「森ケ崎」と名付けられた旨書かれている。この土地柄を生かし、月見の宴を開く等楽しんだ記述が藩日記に見受けられるという。池上大坊本行寺は藩主の菩提寺で歴代藩主の墓所があるとのこと。近々行ってみたいと考えている。

三日月町(現在は佐用郡佐用町)は私の郷里である。毎年中学校の同期会が郷里で開催される。その際東京に残る三日月藩ゆかりの事柄を話題にしたいと思っている。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会：10月16日(火)過去1年間の会計報告、向う1年間の事業計画などについて協議し、新世話人に武田夏男さんを選出した。参加者は13人。11月11日(日)深川江戸資料館小劇場で行われたアマチュア落語会(楽笑会、サークルメンバーの山内啓巳さん出演)に参加し楽しんだ。参加者21人。

◆藩史研究会：10月12日(金)国定美津子さんが「上野沼田藩」の研究発表を行った。豊富な資料による詳しい発表で、一同興味深く聞いた。参加者は15人。11月9日(金)遠藤陽子さんが「越前大野藩」について研究発表を行った。参加者も納得のいく分かりやすく楽しい説明だった。参加者14人。

◆古文書で『八犬実記』を読む会：10月11日(木)、26日(金)、11月8日(木)に例会を開催。参加者は各8、7、8人。

◆神田川を歩き楽しむ会：10月25日(木)と28日(日)に第34回として、万世橋から左衛門橋まで歩いた。途中、柳森神社、千葉周作玄武館跡、お玉ヶ池跡などを参拝あるいは見学した。参加者は各48人、31人。11月29日(木)と12月2日(日)に第35回として、左衛門橋から柳橋までを歩き、3年におよぶ神田川歩きに終止符を打った。参加者は各56人、32人。

◆『江戸名所図会』輪読会：10月15日(月)高野祐子さんの担当で白金高輪地区を読み、活発な意見交換が行なわれた。参加者18人。11月26日(月)小林弘明さんの担当で元三大師堂から太鼓橋までを読み、質問、討議で盛り上がった。参加者19人。

●新サークル・メンバー募集

◆日本の大道芸伝承会

いま大道芸といえば、南京お手玉(ジャグリング)や形態模写(パントマイム)などの洋物を指すようになってしまいました。これに対し、「南京玉すだれ」や「がまの油売り」、「バナナのたたき売り」のように、わが国にも古来から伝わる大道芸がたくさんありました。このような日本の大道芸を発掘・記録し、伝承(大道芸学習会・講演会の開催)したいと思い、サークルを設立します。各種会合や宴席等での隠し芸にも大人気の大道芸を一緒に始めませんか。参加ご希望の方は1月末までに事務局宛てに氏名、会員番号を明記してはがきでお申込みください。お申込みいただいた方には詳細をご連絡します(世話人・光田憲雄)。

◆『落語で江戸散歩』をなぞる会
(略称：落語散歩の会)

平成24年3月まで25回にわたって会報『えど友』に連載された「落語で江戸散歩」を興味深く読んだ会員は多いと思います。そしてその記事に従って歩いてみようと思った人も多いでしょうが、実際に歩いた人は少ないのではないでしょうか。そこで、あの記事をベースにサークルで歩いたら楽しいだろうと考えました。ただし、落語マニア的な視点でなく、落語をネタにしてポピュラーなコースを歩きたいと考えています。「神田川を歩き楽しむ会」の後継企画ですが、新たにメンバーを募集します。毎月最終木曜・日曜の2回開催予定ですので、平日参加が無理な方も参加できます。参加ご希望の方は1月末までに事務局宛てに氏名、会員番号を明記してはがきでお申込みください。お申込みいただいた方には説明会などの詳細を連絡します(世話人・松原良)。

＊　＊　＊　＊

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しています。奮ってご参加ください(ただし、輪読系の2サークルについては欠員が出たときに先着順で参加いただくことになります)。参加ご希望の方は、はがきに①サークル名、②会員番号、③氏名を記入の上、友の会事務局へお申込みください。また**新しいサークルの立ち上げ**希望の方は友の会事務局へお問い合わせください。

申込・問合せ先
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

友の会めも(開催日と人数)

平成24年10月～11月

◆役員会10月9日(火)14人。11月13日(火)15人。◆事業部会10月2日(火)21人。11月6日(火)22人。◆広報部会10月16日(火)14人。11月20日(火)16人。◆総務部会10月30日(火)21人。11月27日(火)12人。◆役員等候補者推薦委員会11月13日(火)10人。◆文政町方書上翻刻プロジェクト10月4日(木)A8人、B10人。10月18日(木)A6人、B9人。11月1日(木)A8人、B10人。11月15日(木)A9人、B8人。◆古文書講座　入門編10月3日(水)午前79人・午後59人。11月7日(水)午前79人・午後54人。初級編10月17日(水)午前51人・午後47人。11月28日(水)午前54人・午後41人。中級編10月13日(土)午前34人・午後21人。11月17日(土)午前37人・午後16人。

第122回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成24年10月27日）

「坂本龍馬と刀剣 ―龍馬を斬った刀」

講師　小美濃清明さん（幕末史研究家）

坂本龍馬と刀剣

私の父は明治生まれで日本刀を研ぐ仕事を戦前からやっており、当時は軍刀を研ぐのに忙しかったようです。太平洋戦争後日本刀は武器ということで所持禁止となり、昭和25年(1950)銃刀法が施行され、美術品として価値のあるものは持ってもよいということになり、刀剣の世界も活況を呈したということです。私はそういう世界を見てきました。

坂本龍馬の写真をみると、龍馬は袴の紐に短刀を差しています。これはおかしい差し方です。普通は袴の下の角帯に差すのです。このことを恩師・宮地佐一郎先生(龍馬研究第一人者。『龍馬の手紙』の著者)にお話したところ、そういう研究は誰もやってない、やったらどうだということで、刀と龍馬という研究に入ったわけです。龍馬は刀の鑑定にもすぐれていたと思われます。

龍馬の手紙

龍馬の手紙を読んでみると刀のことが多く出てきます。以下４通の手紙をみてみましょう。

第一は、暗殺される２日前の慶応３年(1867)11月13日(推定)自然堂(下関本陣の部屋に自然堂という額を掛けていた)という号で書いた陸奥宗光(海援隊、外務大臣)宛ての手紙です。この手紙では龍馬が陸奥宗光より頼まれた短刀の鑑定をしています。

「…御もたせの短刀はさしあげんと申た私のよりは、よ程よろしく候。但し中心(なかご)の銘及び形。是ハまさしくたしかなるものなり。然るに大坂より刀とぎかへり候時ハ、見せ申候。…」

なかごというのは刀の柄の中に入る部分で、そこに銘をきる、形、刻してある筆跡鑑定というように、龍馬は刀を鑑定する一つのポイントをきちっと押さえています。これで専門的な鑑定をしていると、よく分かるわけです。

第二は、宛先年月日未詳で、差出人は才谷梅太郎となっている手紙です。

坂本家の本家は才谷屋という豪商で、龍馬は変名をいろいろ使っています。

「…やどにかりてあるたんすのひきだしの下タのはしのひきだしに、白ラさやのたんとふがある…」

「たんとふ」は短刀のことで、ここにも刀が出てきます。この手紙はかなで書かれ、宿のたんすをかりていることから、長旅で滞在中の、おそらく妻おりょうに宛てた手紙だろうと思いました。

第三は、慶応２年(1866)12月４日、坂本権平(龍馬の兄)宛ての手紙です。

「一筆啓上仕候。寒気節益御安養可…」で始まる手紙ですが、刀に関わる部分はおよそ次のような内容です。

「…昔より国難に臨む時は家宝の甲、刀を分かつとあり、命がけで行動しているから、坂本家の刀を一振り欲しい、死んで行く時傍らに自分の家の刀があれば思い残すことはないので是非お願いします。…」

望郷の念があるのでしょうね、実際そのようにして亡くなったわけです。兄の権平は鹿児島へ帰る西郷隆盛に家宝の刀「吉行」を龍馬に渡すよう頼み、その後中岡慎太郎より「吉行」は長崎にいる龍馬に渡ります。そして龍馬は京都へ行くとき，この「吉行」の刀を差して行くわけです。

第四は、慶応３年６月24日坂本権平宛ての手紙です。これも刀に関わる部分を抜き出すとおよそ以下のようになります。

「…西郷より受け取った「吉行」の刀(中の作位)を京都に行くときは常に差し歩いております。京都の刀剣家に見せましたら、皆さん粟田口忠綱(刀鍛冶のランクで大関クラスの名刀)位良い刀と鑑定されました。皆に褒められ、土佐の友人がしきりに欲しがったりしていますが、私も兄の賜り物ということで大変誇りに思っております。…」

この手紙から、幕末の動乱の時に京都で「吉行」を何度も鑑定してもらい、喜んで「吉行」を差して歩いている、いかにも刀の好きな龍馬らしさがみてとれます。

岩崎弥太郎日記

『瓊浦日暦』(瓊浦は今の長崎)という岩崎弥太郎日記の慶応３年４月～６月の記録では、龍馬と岩崎は仲が良く、互いの私物を交換したり(武士の間では刀の鍔とかのプレゼントが頻繁に行われていた)していました。

６月９日の日記には龍馬より菊池槍の短刀が欲しいと言われたが断り、代わりに馬乗袴を仕立てて贈り、そして午後長崎港で水蓮船に乗り上洛する龍馬と後藤象二郎を見送り涙したと書かれています。後日この両人は京都で大政奉還の大活躍を演ずるわけです。

近江屋の古写真と削られた鞘

慶応３年11月15日の寒い夜、龍馬は近江屋２階で刺客に襲われ、亡くなりました。龍馬の刀「吉行」は床の間に飾ってあって抜きにくく、突然襲われ応戦したとき龍馬の刀が天井を突き破り、「吉行」の鞘が６寸(18㎝)、刃は３寸(９㎝)削られています。「吉行」をこれだけ削っていることから相手は大刀と思われます。

龍馬暗殺現場である近江屋については「近江屋裏八畳間の古写真」があり、傾斜天井であることが確認でき、当時の様子をうかがい知ることができます。暗殺のところは『龍馬八十八話』に詳しく載せましたので興味のある方はどうぞそちらをお読みください。

おわりに

龍馬は非常に面白い人物で，掘れば掘るほどいろいろな話が出てきます。今別に龍馬の本を書いていますのでそのうち発表したいと思います。

レポーターからひとこと

以前、高知の記念館で理解もできずにたくさんの手紙を拝見し、立派な龍馬の像を拝みました。あらためて愛刀「吉行」への深い深い思いに感動しました。参加者は94人。

【記録】文：広報部会・竹中裕見子
写真：同・佐藤幸彦

第123回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成24年11月10日）

「子孫が語る家康六男忠輝の末裔 松平忠敏の幕末史」

講師　松平康夫さん（江東区文化財保護審議会会長）

幕末期に活躍した松平忠敏は新選組が登場するきっかけとなった浪士組結成の献策者、講武所剣術師範方の剣豪、家康六男忠輝の末裔と記憶している人もいると思います。今日は知られていない事歴を中心にお話します。

忠輝改易によるお家断絶と再興運動

忠輝が十代として継いだ長沢松平家は改易で絶家になり無高で生活が困窮し何度も再興を訴え、ついに享保6年(1721)系図や文書(御判物)を江戸城大手の橋に捨てるという非常手段によって家名だけ認知されました。その後三河国長沢村(音羽町)に領地をいただき5カ年に一度参府し格式だけは帝鑑間で将軍にお目見えする資格をもちました。しかし、無高だったため参府する費用もままならなかったようです。旧家臣団からの資金援助の一端を示す松平家文書が残っています。

十七代忠敏幕臣となる

天保年間から道場をもつ実戦的剣法である柳剛流の師範だった忠敏(主税助(ちからのすけ)、上総介(かずさのすけ))は嘉永6年(1853)のペリー来航をきっかけに推進された幕政改革により設立された講武所の剣術教授方に安政3年(1856)登用され、長沢松平家は10人扶持300俵取りの幕臣となりました。安政以降の『武鑑』では交代寄合格(表高家扱い)と位置づけられ柳間詰老中支配となっています。

ペリー来航時には福井藩主松平慶永のブレーン中根雪江を突然訪れ熱弁し、その後慶永宛書簡で家再興を願うとともに有事の際には武人として国土防衛のためにご奉公したいと訴えています。

浪士取立計画のキーマンとして活躍

文久2年(1862)末、将軍家茂が攘夷決行の勅命を受諾し上洛することとなりましたが、京都では尊王攘夷をスローガンとする浪士のテロが吹き荒れ、浪士対策が幕府にとって緊急課題とされました。その対策を幕府に提出したのが忠敏と尊王攘夷派の志士庄内藩郷士の清河八郎でした。大赦を主眼とした八郎の抽象的な案に対して忠敏が文久2年10月に提出した「講武所教授方松平主税助上書」は浪士問題の原因は安政の大獄とし、混乱を収拾するために浪士を大赦し有能な浪士や藩士の意見をくみ取り登用の道を模索し、まずは将軍上洛の警護役として江戸近在のリーダー格の浪士を探し出し幕府に登用して供奉させる(新選組誕生の基になる計画)という具体的な上書案でした。

八郎とともに忠敏は幕府に浪士取立計画を持ちかけ、文久幕政改革の中心にいた松平春嶽のもとへ頻繁に相談に赴き、浪士の扶持や手当、必要な予算、自分のポスト、浪士屋敷の確保など浪士取立の現実的な対策、見通し、メリットを模索して幕府上層部とのパイプ役となりました。また二度にわたって取り立てるべき浪士、藩士名簿を提出しました。驚くべきことに、坂本竜馬、久坂玄瑞、大島三右衛門(西郷隆盛)、宮部鼎蔵、真木和泉、田中河内介、益満休之助、松浦武四郎など歴史的著名人がたくさん入っていました。忠敏は八郎だけでなく、熱心な門人であった平田国学「気吹舎(いぶきのや)」、柳剛流などを通じて全国的な政治や人材に関する情報を入手していたと思います。

忠敏は浪士組を京都に警護役として連れて行く前に教授方兼浪士取扱という役職から異動、昇進し、講武所師範役になり旗本としては最高位の諸太夫従五位下上総介に任じられました。江戸に帰還した浪士組は文久3年(1863)4月清河八郎が暗殺された後、江戸市中を警護する「新徴組」に編成替えされ、忠敏は新徴組支配を命じられています。

幕末の戦いの中から明治へ

元治元年(1864)9月に起こった第1次長州戦争に講武所剣術師範役を辞任し参加、長沢松平家の旧臣有志の者30余人引き連れて従軍、戦争での勲功が大名取立の千載一遇の絶好の機会とみていたようです。尾張前大納言徳川慶勝に付属し、従軍で詠んだ歌を「歌日記」に残しています。停戦の時の大名、旗本を招いての慰労の宴にも招かれ歌を詠んでいます。その後も幕臣として慶応4年(1868)2月清水小普請支配になりましたが直後に辞任、3月に忠敏は家臣および幕臣で榊原健吉の門弟野見鍹次郎らと江戸を退去しています。

幕末にいくつかの歌集に歌が載っていますが、維新後は明治7年(1874)宮内省歌道御用掛として出仕、年始の歌会の選者にもなりました。

忠敏は三河以来の名家長沢松平家を再興するため旧臣のために奮闘し、平田国学門下としては尊王攘夷論者、幕臣としては公武合体論者として生きた特異な一例としてご紹介できたと思います。

最後に複数の小説の中で間違った通説(松平忠敏は徳川忠長の子松平長七郎の子孫)が受け継がれていったことは残念であり、歴史考証の重みを痛感しています。

レポーターからひとこと

歴史小説の中で幕末はとてもおもしろいジャンルです。物語の中の人物が本当はどんな人だったのだろうか。興味深い歴史上の事実を楽しませていただきました。参加者121人。

【記録】文・写真：
広報部会・佐藤美代子

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成24年10月12日）

江戸東京博物館 開館20周年記念「維新の洋画家　川村清雄」

維新の洋画家川村清雄展の観覧会が10月12日の夕刻に開催されました。最初に落合則子学芸員の解説を聴講した後見学に入りました。

彼の名はキヨヲというのでしょうが、欧米の人々との交際の上では常にキヨと署名をし、また友人からのレターもキヨ宛となっています。本展の図録もすべてキヨのローマ字書きとなっています。キヨは大政奉還後駿府にいた徳川家の当主家達が、アメリカに派遣した５人の留学生の一人で当時20歳でした。大久保一翁の何でもよいから一つのことをしっかり習ってこいという指示を受けキヨは美術を習うことにします。明治４年(1871)ニューヨークでアカデミースクールに入学、翌年ミシガン大学に移り、ここで画才を認められました。明治６年(1873)、パリに移りました。明治９年(1876)の初めにヴェネツィアに移り、美術学校で勉強を始めました。パリでは油彩の技法を学び、ヴェネツィアでは豊かで明るい色感を学んだと思われます。

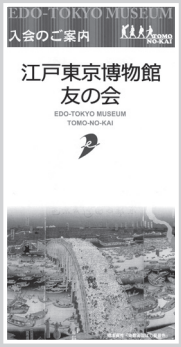
この間、海外留学生に帰国命令が出されたのですが、キヨは私費で留学を続けることにしました。明治10年(1877)には美術学校の学年末試験で一等賞を獲得、イタリーの画壇で頭角を現しました。彼にとって幸いだったことは明治11年(1878)にパリで万博が開催され、いわゆるジャポニズムの追い風が吹いたことです。いろいろな友人から称賛を受け、西洋の技法に和魂を注ぎ込むようにと激励されました。 大蔵省の命により帰国したのは明治14年(1881)12月14日、大蔵省印刷局の彫刻技手になりましたが、10カ月後に退職。その後、画業に専念しました。勝海舟肖像、歴代将軍肖像、天璋院肖像等を受注、納入しました。官展には出さず、弟子も取らず、受注した絵を描いていたためか、彼を「孤高の絵師」とする表現は実に適切だと思います。

今回の展示で多数の作品と文書類を集め得たのは、清雄の嗣子清衛氏(故人、ＮＨＫ元職員)の整理保存の努力が大きく貢献したようです。本展の図録は印刷が大変美しく、説明も懇切丁寧で、重量は約1.4kg もある大作です。参加者は76人。

【取材】文・写真：広報部会・佐藤幸彦

「入会案内」がリニューアル

この度、友の会の「入会案内」がリニューアルされました。江戸博館内のラックに置かれていますので、お知り合いのお誘い等にご活用ください。



江戸博クリップ

「おひとりさま」

学芸員　　粟　屋　朋　子

「おひとりさま」という単語を近年よく目にする。どちらかと言えば、複数で行うと考えられていた行動を一人で行う場合やその本人を指すようだ。孤独をあまり感じず、一人で行動することが苦にならない私は、「おひとりさま」を満喫している。

一番多いのは、ひとり観劇だろう。はじめて一人で芝居を観たのは小学３年の時。地元公会堂で地元劇団の公演があり、友達と待ち合わせたが、来ない。結局、一人で演劇を楽しんだ。舞台を観ることが好きだったので、小・中学生の時は両親等に連れていってもらい、高校生の頃は同級生と行ったが、大学に入ると一人でもずんずん観に行くようになった。初演や評価が定まっていない舞台の場合は、同行者が満足するかがわからない。とりあえず一人で観てから、と思ううちに、ひとり観劇の回数が増えていった。

観劇中に空腹でお腹が鳴っては周囲に迷惑がかかるので、ひとりご飯も平気になった。

歌舞伎、ミュージカル、芝居などを見るために、名古屋・京都・大阪・博多など地方都市の大劇場や、金丸座・八千代座・康楽館・永楽館といった桟敷のある古風な芝居小屋などにも出かけた。ひとり観劇の延長で、ひとり旅にも行くようになったのである。

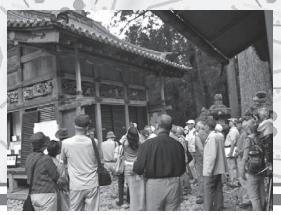
観劇の合間に観光するので、水族館、展望台、見世物小屋やお祭り、遊覧船など、「おひとりさま」がやや浮く場所にも行っている。その点、博物館や美術館は、「おひとりさま」でも違和感なく溶け込める空間なので、地域・展示内容を問わず、入りやすい。

江戸東京博物館でも「おひとりさま」の姿をよくみかける。当館が、「おひとりさま」はもちろんのこと、家族や友人、団体など多様な形態に対応できる施設であり続けられるよう、微力ながらも努力を続けていきたいと思っている。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成24年10月5日）

「日光東照宮および周辺見学」（バスツアー）



日光廟大猷院と日光山輪王寺

今年はバス３台に分乗し、世界遺産の日光へと出発です。初踏地は徳川第三代将軍家光公の墓所「輪王寺大猷院」。仁王門の真っ赤な仁王像は、霊廟を守る力強さを感じさせます。続く二天門は修理中でしたが持国天・広目天と緑の風神・赤の雷神が安置されています。次に人界庭園を見下ろしながら、高い石段を上りきると、夜叉門の緑、赤、白および青の四体の夜叉像がにらみを利かせ、さらに唐門をくぐると、拝殿・本殿になります。この大猷院は主に赤と金色の装飾ですが、東照宮は白と金を基調としています。

湯葉ずくめの昼食後、日光玄関口の「日光山輪王寺」に移動します。

▶大猷院

約1,200年前に創建の輪王寺は山岳信仰の拠点として発展しましたが、豊臣秀吉のとき北条側につき寺領を没収され、江戸時代に天海僧正が入り復興。家光公再建の本堂三仏堂は、日光山内最大の建物とか。

日光山東照宮

いよいよ「東照宮」。表門をくぐり、左手にある神厩舎に刻まれているのが「三猿」です。馬を病気から守るという信仰によります。陽明門は日暮門とも呼ばれ、終日眺めても飽きぬという意味。本地堂は薬師如来を祭る大伽藍で、天井の「鳴龍」で有名ですが、昭和36年(1961)に損焼し復元。現在は聞くことできず、代わりに「鳴鈴」をお買いくださいとのお勧めでした。「眠猫」は立ち止まらずに通過。「拝殿」は修繕中でした。

東照宮・二荒山神社・輪王寺と二社一寺103棟の建造物が、平成11年(1999)世界遺産に登録されています。

特別公開の東照宮五重塔

特別公開中の「五重塔」の周りをひと巡り。高さ36m。四重層から吊り下げられた心柱が、高層建築の振動を調整する工夫がされています。その心柱の下部の構造は？　何と、吊り下げられた心柱は眩いばかりの金色で、床板の丸い穴を突き抜け、柱の最下部は細く造られ、土台の穴にはめられていました。

▲五重塔

最後は日光山内最古の「二荒山神社」で自由行動となり、16時15分頃、バスで帰路に着きました。

レポーターからひとこと

奈良の法隆寺をはじめスカイツリーなどは心柱の下部で固定されています。日光のような懸垂式の五重塔は珍しいので、その上部も見たいですね。参加者121人。

【記録】文：広報部会・国定美津子
写真：広報部会・竹中裕見子

『町方書上』翻刻版　いよいよ刊行！

『町方書上』は、幕府に命ぜられた名主が申伝えなどを調べ上げて書いた江戸の町の貴重な資料集です。江戸は火事の多いところでした。当時から旧記・書留などは焼失して多くは残っていませんでした。町にはどんな歴史があり、町名はどんな経緯でついたか、広さは何坪で公役銀(町にかかる税金)はどれくらいだったか、家数は何軒で、借店と家持や地主の数はどのくらいだったか、旧家といわれる人たちはどこから来て、どんな家筋で、どんな商売であったか等々。また孝行者の記録からは、その日稼ぎの息子が妻も迎えず寝たきりの老親をみとる話が多くあり、まれには実際あった町人の敵討ちも出てきます。調査は文政8～12年(1825～1829)に行われました。

本会の翻刻プロジェクトも活動を始めて４年が過ぎ、ようやく翻刻作業の８割以上を終えて、**『第一巻　外神田・下谷』『第二巻　浅草』『第七巻　深川』**の３巻が２月に刊行されることになりました。会員のみなさんで購入をご希望の方がありましたら実費で頒布いたします。頒布価額は各巻2,000円、送料別。ご希望の方は、はがきに会員番号、氏名、送付先、希望する巻数、必要冊数を書いて、１月末までに友の会事務局宛てお申し込みください。

＊昨年から『町方書上』は国会図書館の電子図書館で原本の影印版が自由に見られるようになりました。自宅のパソコンから無料で印刷もでき、翻刻本と合わせて見れば古文書の学習にも役立てることができます。

『町方書上』(全九巻)

第一巻　外神田・下谷
第二巻　浅草
第三巻　根津・谷中・湯島・本郷など
第四巻　牛込・市谷・四谷・麹町など
第五巻　赤坂・青山・渋谷・麻布など
第六巻　芝・三田・白金・目黒など
第七巻　深川
第八巻　本所・小梅・柳島・亀戸など
第九巻　総索引

江戸

名所図会を歩く…⑤

［霊岸島から鎧島］

佃住吉神社の鳥居扁額

『江戸名所図会』は全７巻からなります。７巻に分けたのは各巻にほぼ同じ数の名所を配置するという実利的な理由のほかに、江戸とその近郊を北斗七星の星々に見立てる意図があったようです。巻之一天枢之部に始まり、巻之七揺光之部で終わるその呼び名は、中国で北斗七星の柄杓の器の部分を作る星を天枢・天璇・天璣・天権、柄の部分を作る星を玉衡・開陽・揺光と呼ぶのに倣っています。さて、今回は三ツ橋の続き、霊厳島からです。東京メトロ「茅場町」駅４b 出口の階段を上がるとすぐ先に霊岸橋が見えます。

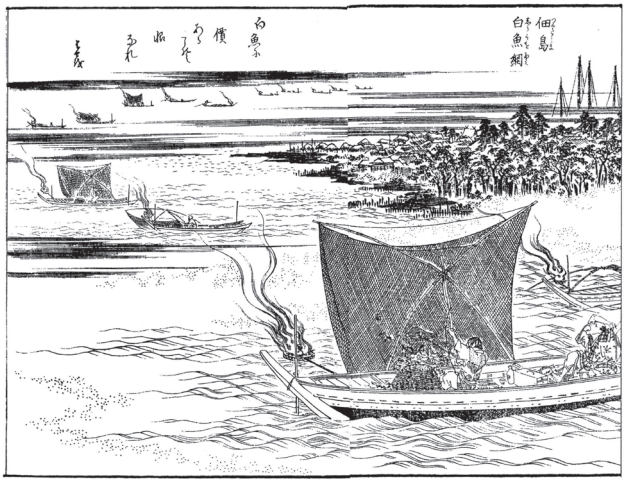
霊厳島から伊勢太神宮（新川大神宮）

霊厳島は箱崎の南側に位置し、初めは「江戸の中島」と呼ばれた埋立地でした。雄誉霊厳和尚がこの地に霊厳寺を創立したため、後世霊厳島という名が起こりました。寺は明暦３年（1657）の大火で焼失の後、万治元年（1658）深川へ移り、その跡が町屋となりました。この地の北の通りから茅場町へ渡る橋は霊岸橋と名付けられ、今は永代通りにあります。元の霊岸橋は今の日本橋水門の所にありました。

霊岸橋を渡って右にすぐ見えてくるホテルの前には河村瑞賢屋敷跡の説明板があります。幕府の御用商人として活躍し、その財をもって海運や水運に大きな業績を上げた功により、晩年は旗本に任ぜられたとあります。

ホテルの裏の道に入って少し行くと新川大神宮があります。図会では「伊勢太神宮」となっていて、創建の由来は伊勢内宮の社僧、慶光院にあるようです。慶光院比丘尼が江戸参府の折りに宿泊する屋敷が以前は三の丸にありましたが、明暦の大火で焼失し、霊厳島に替地を賜ってそこに伊勢両宮の遙拝所を設けたのが始まりといいます。

この地には河村瑞賢によって新川と称した水路が開かれ、伊勢太神宮を中心に酒問屋が建ち並び繁盛していました。この宮は産土神として庶民にあがめられ、特に酒問屋の信仰があつく、上方から届いた新酒はこの宮に捧げてからはじめて販売されたとあります。伊勢信仰から産土神祭祀への移行や、新川大神宮と呼ばれるようになった経緯はわかりませんが、繁盛の様子を思えば呼び名の変遷も納得できます。



▲長谷川雪旦　　佃島　白魚網

永代橋から湊稲荷社（鉄砲洲稲荷神社）

永代通りに戻って、永代橋に向かいます。永代橋は元禄11年（1698）現在よりも100ｍほど上流、箱崎と永代島の深川佐賀町の間に架けられました。ここは諸国の廻船が行き交う重要な湊であったために橋脚が高く作られ、橋の上からは房総半島、富士山、筑波山と絶好の見晴らしでした。先日東京スカイツリーに夜登ったところ、夜景の中でひときわ目立ったのは東京タワーと、この青白くライトアップされた永代橋だったことは意外でした。

永代橋西詰から隅田川テラスへ降り、下流へ進むと中央大橋の先で亀島川が合流しています。南高橋で亀島川を渡り少し行くと湊稲荷社（鉄砲洲稲荷神社）です。元の位置は現在地より200ｍほど北側で、江戸湊の入り口にあたるこの地は廻船入津の湊として多くの船が碇を下ろし、この社の前に荷物を積み上げて問屋に運んでいました。この社は南北へおよそ八町の鉄砲洲の産土神でもあります。鉄砲洲の名の由来は寛永の頃、「大筒の町見を試し所なりと、或いはこの出洲の形状その器に似たる故の号なりともいへり」とあります。

佃島と住吉明神社

鉄砲洲稲荷から佃大橋を渡って佃島へ。徳川家康との縁で江戸へ呼ばれた34人の摂津国佃村の漁人が「寛永年間鉄砲洲の東の干潟百間四方の地を給わり、正保元年二月漁家を立並べて本国佃村の名を採て即佃島と号く」とあります。漁民達は家光の命により毎年11月から３月まで白魚をとって献上し、今でもその習わしが続いていると「ブラタモリ」で放送していました。驚きですね。冬の夜、かがり火を掲げた船から四つ手網を繰る白魚漁の挿絵には幻想的な雰囲気が漂います。住吉神社は摂州の住吉から分社して佃島に建立されました。正面鳥居の扁額は陶製で、額字は有栖川宮織仁親王の筆というのは初めて気がつきました。社殿は質素ながら好もしいたたずまいで、昨年新調された八角神輿も見られます。神社を出て赤い佃小橋の架かった堀には佃住吉講による「大幟を立てる柱・抱」が埋設されているという立て札がこの地の由緒を感じさせます。

鎧島（石川島）

佃島から堀を隔てて北側は佃公園ですが、ここはもう石川島です。公園のキンモクセイが満開で、花が散り始めていました。大猷公の頃、石川氏の先代がこの島を拝領したため石川島と名付けられたとありますが、旧名は森島とも、八幡太郎義家の故事から鎧島とも呼ばれていました。寛政４年（1792）石川氏が永田町へ屋敷替えになってからは、石川島は炭置き場や人足寄場となりました。

【取材】歩いた人（文・写真）：
広報部会・中村貞子

催事案内

古文書講座

第３期の日程

古文書講座の今年度第３期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学文学部史学科助教)
- 開催日：1/9(水)、2/6(水)、3/13(水)

◆初級編
- 講師：吉成香澄さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/16(水)、2/20(水)、3/27(水)

◆中級編
- 講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：1/19(土)、2/16(土)、3/16(土)

- 時間：各講座とも午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博１階会議室又は学習室1,2
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●江戸東京博物館 開館 20 周年記念特別展 2013 年ＮＨＫ大河ドラマ特別展 「八重の桜」

◆平成25年1月から始まるNHK大河ドラマ「八重の桜」と連動し、福島県出身で、同志社大学を創立した新島襄の妻、新島八重の生涯を追う展覧会です。自ら銃をとって戦った戊辰戦争や、看護師に志願、従軍した日清・日露戦争などの幕末から明治期の歴史資料が展示されます。担当の齋藤慎一学芸員による「見どころ解説」をお願いしていますので、ご期待ください。

- 開催日：3月15日(金)17時～19時
- 申込締切：3月4日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者700円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

友の会セミナー

第 125 回　[江戸･東京の「願掛け」･「まじない」]

講師　加藤紫識さん(千代田区立日比谷図書文化館　文化財調査指導員)

◆日本では、古くから神仏や超自然的な存在に願い事を実現させようとする行為として、「願掛け」や「まじない」が行われてきました。こうした行為は、近代以降、非科学的で非合法的として避けられる傾向にありましたが、現在でも行われているものも多くあります。そうした中から、現在では行われなくなった江戸の願掛け・まじない、あるいは現代に続いているものも含めて、願掛け・まじないの諸相を民俗学の視点で解き明かしていただきます。

○講師略歴：かとう・しのぶ
東洋大学大学院文学研究科国文学専攻博士前期課程修了。専門は日本民俗学。平成12年(2000)より千代田区立四番町歴史民俗資料館文化財調査指導員として勤務。平成23年(2011)11月より現職。「千代田の稲荷」(平成20年・2008　千代田区教育委員会)、「千代田の記憶」(平成22年・2010　同委員会)などを担当。また現在は学習院生涯学習センターの「江戸学講座」講師も務める。

- 開催日時：１月26日(土)14時～15時30分
- 申込締切：1月17日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

第 126 回　「町方書上翻刻版刊行を記念して」

講師　市川寛明さん(江戸東京博物館学芸員)
髙山慶子さん(宇都宮大学教育学部准教授)

◆友の会では江戸博の学術的な協力を受けながら『町方書上』の翻刻を進めてきましたが、別項(9ページ)のようにこの度その「翻刻版」を刊行する運びとなりました。それを記念して、翻刻に際して直接ご指導をいただいた市川寛明､高山慶子両先生に『町方書上』に関連したテーマでお話をいただきます。

○講師略歴：いちかわ・ひろあき
江戸東京博物館都市歴史研究室研究担当係長・学芸員。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了､社会学博士。編著に『一目でわかる江戸時代』(小学館)『江戸の学び』(河出書房新社)など。

○講師略歴：たかやま・けいこ
江戸東京博物館専門研究員を経て、現在宇都宮大学教育学部准教授。著書に『江戸深川猟師町の成立と展開』(名著刊行会、平成19年・2007)、編集担当に『大伝馬町名主の馬込勘解由』(東京都江戸東京博物館調査報告書第21集、平成21年・2009)などがある。

- 開催日時：2月24日(日)14時～16時
- 申込締切：2月14日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】西村英夫(事業部会)

第 127 回　「鞠も落ちねば上がり申さず候 (源内、江戸を駆ける！)」

講師　小中陽太郎さん(作家)

◆以下は小中先生の言。「高松藩の下級武士として生まれた平賀源内は、学問の栄達を求めて藩に辞職を願う。それに対して、藩は「仕官御構い」(他家にも一切就職してはならない)の処分で応ずる。封建身分制に苦しみつつ、時代に先駆けて己が才能の赴くままに生きた天才が追い求めたものは何だったのか。それは、失敗を恐れぬ不屈の冒険心であった。これぞ、平賀源内が疾走する大江戸戯作ワールド」。新資料、新解釈による源内像をお話していただきます。江戸博のある両国橋からスタートです。

○講師略歴：こなか・ようたろう
作家。昭和9年(1934)神戸市生まれ。東大仏文卒、ＮＨＫを経てベ平連を結成。著書「天誅組始末記」「青春の夢」など。

- 開催日時：3月9日(土)14時～15時30分
- 申込締切：2月28日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】松原良(事業部会)

地域文化探訪・学習会　新企画第2弾！

日比谷図書文化館を訪ねる

◆都立日比谷図書館と四番町歴史民族資料館がひとつになって平成23年11月、日比谷公園の中に開館しました。江戸城を中心とした千代田区の歴史と文化を学びます。特別展「徳川将軍家の器」も見学します。

- 開催日：2月26日(火)10時20分集合
- 集合場所：日比谷図書文化館大ホール(地下1階)
- 交通アクセス：都営地下鉄三田線「内幸町」駅、東京メトロ千代田線・日比谷線・丸ノ内線「霞ヶ関」駅から徒歩5分
- 申込締切：2月14日(木)必着
- 定員：60人**(会員のみ)**
  ＊**定員を超えた場合は抽選**、ご希望に添えないこともあります。
- 参加費：500円

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

お申込方法

＊**「えどはくカルチャー」など江戸博への申込と違い、普通はがきで宛先も「友の会事務局」と明記ください。お間違いなく！**

◆**普通はがき**に、①催事名（略名可）・開催日、②会員番号、③氏名（同伴者連記）を明記して下記の「友の会事務局」へ。
「往復はがき」の必要はありません。なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、郵便番号、住所、電話番号も書いてください。
◆締切：各催事の案内をご覧ください。
◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があればご記入ください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などは事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いいたします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

新年1月2日より開催！

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展
「尾張徳川家の至宝」

会　期　1月2日(水)～2月24日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし1月14日、1月21日、2月11日は開館)。2月12日(火)は休館
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。

次回予告

●江戸東京博物館 開館20周年記念特別展
2013年NHK大河ドラマ特別展
「八重の桜」

会　期　3月12日(火)～5月6日(月・祝)
休館日：毎週月曜日(ただし4月29日、5月6日は開館)。
会　員：一般650円、65歳以上320円、大・専門生520円
同伴者：一般1,040円、65歳以上520円、大・専門生830円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。
●(注)両展とも割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

●企画展
「浮世絵の中の忠臣蔵・江戸っ子が憧れたヒーロー」
「笑う門には福来る」

会　期　平成24年12月11日(火)～平成25年1月27日(日)
休館日：年末年始[12月25日(火)～1月1日(火)]、1月7日(月)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●次回展覧会
企画展「雑誌にみる東京の20世紀 ー館蔵雑誌紹介ー」
特集展示(企画展と同時開催)「広重・東海道五十三次」

会　期　2月9日(土)～3月10日(日)
休館日：毎週月曜日(ただし2月11日は開館)。2月12日(火)は休館
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

●特集展示
「全部見せます　富嶽三十六景」

会　期　3月15日(金)～3月31日(日)
休館日：3月18日(月)
会　場　常設展示室5階　第2企画展示室

会報＜えど友＞第71号
平成25年1月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(会長)　副編集長：菅沼和男
編集人：佐藤幸彦、深尾恵美子、福島信一、内匠屋京子、中村貞子、佐藤美代子、国定美津子、天野哲夫、前田太門、五十島正修、菊池真一、竹中裕見子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1-4-1　電話03-3626-9910